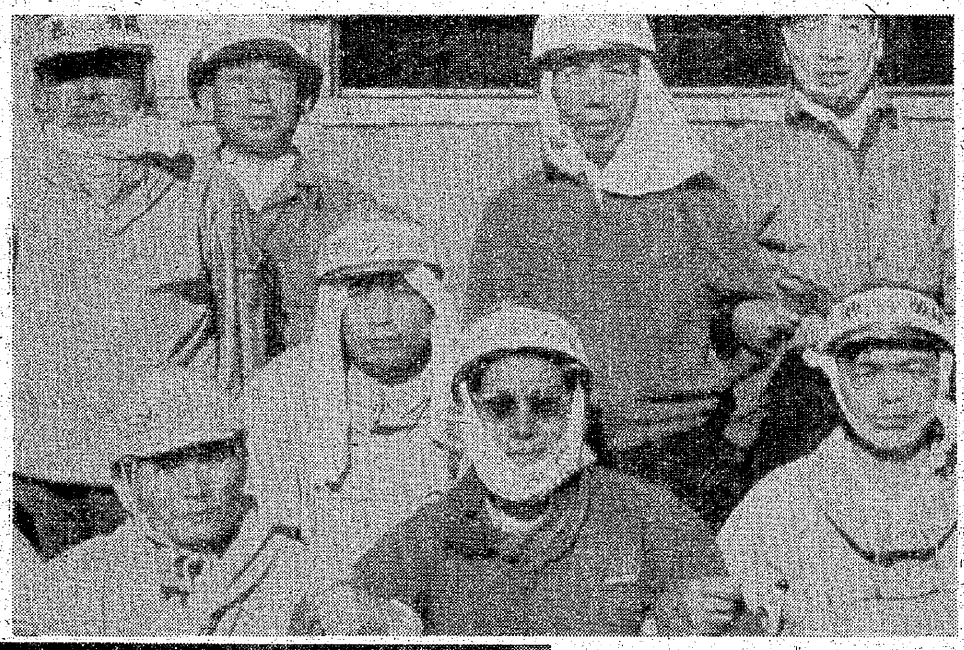
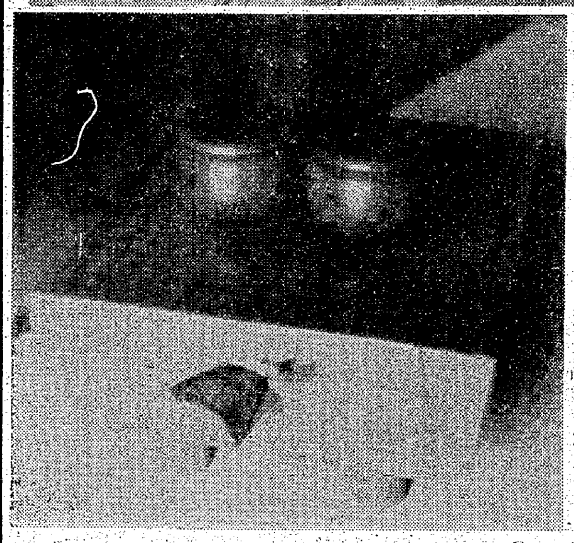
原告団

遺族・CO裁判、災害責任追求、特集号

第四十一号



写真右は、徹君のヒモトキの折り、おまいりしたお宮で撮つた記念写真。弘太さんの最後の面影である。上は、三池闘争のときなかまたちと。まんなかの人が弘太さんで、ホツパースタイルが頼もしい。



遺品となつた、弘太さん愛用の碁盤と碁石。今も、盤面が光つている。

遺族・高橋シゲ子さんの その後

願うは子供のしあわせ

思い出すだけでもゾッとする、歩いてきた道

よくぞがんばり抜いたこの親子

苦しい日々

高橋シゲ子さん。昭和四年四月二十八日生まれで、今年四十六歳。

家族。次女康子さん十七歳（三十三年十二月十一日生まれ）と、長男徹君十五歳（三十五年五月二十四日生まれ）。

住まい。熊本県荒尾市下井手助丸七百二十七番地。市とはいえ片田舎。近所に百姓家もチラホラ。

シゲ子さんは、ここから隣りの町、大牟田市柿園町四番地に在る三池縫製工場へ通勤。

もともと、三池大災害遺族の生活対策を主目的に誘致されたこの企業。勤務は、午前八時十五分から午後五時まで。シゲ子さんは、だから、朝七時ごろにはもう家を出て、帰りは夕方も六時過ぎ。

与えられた仕事は仕あげ。ホーフやフトンカバーなどの製品を、台のうえで一枚一枚アイロンで整える作業。

一日じゅうの立ち仕事で、シゲ子さんは日に千三百枚から千四百枚くらいをこなす。

勤務日を月に二十五日と見れば、シゲ子さんがアイロンがけする枚数を一日千三百枚と低くおさえてさえ、月に三万二千五百枚。年にすれば、三十九万枚というかんじょう。

いつとも知れず巣食った、アイロンもつ右手、腕から肩にかけての痛みはとれなくなり、またどのごろ急に出てきた身のしぼりに耐えかね、とうとう仕事を休んで病院通い。過労にきまっている。

その――、彼女の月々の給料はほぼ四万五千円也（日給千八百三十円）。そのなかから何やかやと差しひかれるので、手取りはといえば四万円がよいところ。

さらにそのなかから、通勤に不可欠なバス代や子どもたちの教育費などが飛び出してゆく。

「主人が生きていてくれたら……」と、つい思ってしまいます」、こぼすシゲ子さん。

それは――、このごろたずねたとある日のことであった。

悲しい追憶

シゲ子さんは、いうまでもなく遺族の一人。

亡き夫の名は、弘太さん。シゲ子さんより一年早い、昭和三年四月十日の生まれだった。

三池闘争に突入する二年ほど前の昭和三十二年の十一月十四日に結婚。弘太さんが二十九、シゲ子さんが二十八のときのこと。

新生活のスタートは、そのころまだ弘太さんが両親たちといっしょに過ごしていた、大牟田市野添鉱員社宅の三十四棟。

弘太さんは再婚の身で、家には先妻の子どもの、まだ四つという長女清子さん（二十八年三月生まれ）がいた。いまでこそ立派に成人し、他で身を立てているが。

ともかく、そこへ康子さんと徹君が加わった。手狭な炭鉱長屋。それこそ人間がはみ出しそうな、窮屈な思いの暮らしだった。

それでも――、シゲ子さんが妻として夫に添えたのは、たった六年間。三十八年の、あの三川鉱大爆発で、かけがえのない弘太さん

そんな彼の死を悲しんだのは、妻のシゲ子さんよりも返って彼女の両親をはじめとする身うちの人たちだったという。異口同音にみんなの人が「惜しかった、惜しかった」と、彼の死を惜しんでくれた。

奈落の底へ

シゲ子さんの生活は一変した。人妻から未亡人へ。しあわせな暮らしから、奈落のドン底へ。

目の前が真っ暗になった。両親に、三人の幼な子をかかえては暮らしてゆけるはずがなかった。

さいわい同じ大牟田市内に、亡夫弘太さんの実兄一家が住んでいたから、両親に、弘太さんと先妻の間に生まれた長女清子さんがそちらへ。特に長女清子さんは、おばあちゃんから、「自分の手もとで育てるから」との希望もあって。

弘太さんの命とひっかえに手にしたわずかな弔慰金・退職金・労災保険給付のなかから、「三人の子どもたちに平等に」と、シゲ子さんは相当のお金を清子さんにつけてやった。

あとに残ったのは、やっと五つになった次女康子さんに、三つになった長男の徹君。それに、シゲ子さんの三人だけ。

三池の連帯のささえはあったものの、日に日にきびしい寒さが加わるにつれ、うつろになったシゲ子さんの心のなかを無情の風が吹き抜ける。

でも荒尾アンニット工場とともに、遺族の生活対策のためにとして誘致された三池縫製工場が操業を開始すると、シゲ子さんはもうそうそうポカンと日々を過ごしてゆくことを許されなかった。

非情な生きざまが始まる。

朝早く、康子さんを保育園におくり出すと、下の子の徹君の手をひっぱって、こんどは自分が働くために工場へ。

そのころは、これらの不幸な幼子たちのために、工場に隣り合わせて保育所が設けられていたから、シゲ子さんは徹君をそこへ預けて職場へ。

馴れぬ仕事に、くたくた疲れながら、徹君の手をとってシゲ子さんがわが家に帰るのは、いつも夕方六時をまわってからだった。

保育園児の康子さんの帰りは早く、毎日昼過ぎ。だからシゲ子さんは、その康子さんが、自分が帰宅するまでの間を過ごす場所も考えなければならなかった。

その場所は――、物置小屋だった。タタミ三枚を敷いた、にわか造りの康子さんの住まい。雨の日も、雪のちらつく冬の日も、康子さんはそこで母親の帰りをひとりでポツンと待ちつづけた。

「帰ったらすぐ家にはいれるようにしてやれば、それにこしたことはありませんけど、そのため火事でも起こしたりしては、それこそとり返しがつきませんでしょう。ですから心を鬼にして……」

絶句するシゲ子さん。

生活守って

でも、よくぞこの親子はがんばり抜いた。

いま、離れて暮らしていこそすれ、長女清子さんはすでにバスガイドとして身を立てており、次女康子さんは「ぜひ人のためになる職業を身につけたい」と、某高校の看護科で勉強。常に一～二席を争い、ひとり息子の徹君は中学。新聞配りのアルバイト。

彼は自分の稼ぎで、カセットテープコーダーを買い、ギターを買った。こんどは、四万何千円もするバンとした自転車を。

町の、英数塾にも通っている。その学費も、自分の稼ぎでちゃんとまかない、学校は学校で学級委員さん。

住まいも、その後現住所へ。

生活は、帰りの一番早い徹君がフロわかし。次に帰る康子さんがお掃除。

シゲ子さんが帰るころには、もうご飯もふっくらとたきあがっているので、自分はただおかずをこしらえればすむという。

亡き人へ

次は、康子さんがまだ小学校の三年のとき、特選となった詩。

おとうさん

おとうさんは
三川鉱ばくはつで死んだ
こんなばくはつが何回も
もしあったら
人びとは死んでしまう
だからばくはつはいやだ

昭和三十八年十一月九日
あれからやく四年
「おかあさんはおとうさんのために、しっかりしごとをしているのよ」
と、おとうさんにいい聞かせたい
でも、おとうさんは
死んでいる

「おとうさんは、あたまがよかったのよ」
と、おかあさんは通知表を
わたしに見せる
「おとうさんにまけないように
がんばるのよ」
おかあさんはよくいう
おとうさんは死んでしまって
もうかえらないのに

わたしはおかあさんのために
しっかりお手つだいを
してやろう

×

「思うだけでもゾッとする、歩いてきた道でしたけど、いまは何のぞみもありません。ただ、子どもたちの将来のしあわせだけです。きっと、亡き主人もよろこんでくれていると思います」

そう語るとき、ああ、シゲ子さんの面をチラリとかすめたやすらぎの表情だった。一家をたずねた、とある日のことである。